

4-5			
主題	家族・介護・医療の実効性のある情報共有の手段について		
副題	共通のシート作成・使用を通じて		
キーワード1	情報共有	キーワード2	多職種連携
		研究(実践)期間	6ヶ月
法人名	医療法人社団 恵泉会		
事業所名	たゆらか倶楽部		
発表者(職種)	丸山 愛美(生活相談員)		
共同研究(実践)者	柴山 朱那、若井 さおり、本田 真知子、荒木 香澄、酒井 隆		
電話	03-5702-2221	FAX	03-5702-4088
今回発表の事業所やサービスの紹介	品川区で、介護保険導入前より 18 年間、認知症に特化した日帰りのケアを行なってまいりました。平成 18 年からは地域密着型通所介護として運営しております。同一敷地内に、認知症疾患センター(診療所型)、精神科クリニック、精神科デイケアがあります。		
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>高齢者支援では、家族、介護、医療などさまざまな人が関与している。</p> <p>そのなかで、本人に対する視点は個人によって、また職種によって大きく異なることが少なくない。このことは、多角的な見かたが出来るという利点の一方で、職种的価値観、家族を含めた個々の視点に捉われすぎるといふ危険性がある。</p> <p>情報共有の必要性、重要性については皆が感じている。しかしながら現時点においては、情報共有に関して、簡便で有用な手段が十分にあるとは言い難い。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>【目的】</p> <p>情報共有がスムーズになる簡便な手段、またその際のポイントを探ることを目的とした。</p>	<p>【仮説】</p> <p>事例を通じて</p> <p>①各関係者がどこを重要視しているのか、それぞれの違い、また共通に必要な情報の種類を抽出することが情報共有の大前提と考えた。</p> <p>②有用と推定される情報共有シートを作成した。</p> <p>③作成したシートの有用性を検討した。</p> <p style="text-align: center;">《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>事例を用いて仮説を検討した。</p> <p>B さん：90 才代、男性。レビー小体型認知症。幻視、意識の変動性が特徴的なケースである。</p> <p>X-4 年物忘れなどの認知機能の低下が見られ、翌年自宅での転倒を機に「妖怪がいる」とのはっきりした幻視が出現した。</p>		

同居の孫夫婦は生活時間帯のずれから介護への関与はなく、隣駅在住の長女が全面的に介護をしている。長女は、隣家の親族からの軋轢や本人の昔の行為（女遊びが激しかったことなど）への嫌悪感を抱きながら、協力者のいないなか長女の責務として介護を行っており、心的負荷や葛藤が多い状態であった。

A. 仮説①（相違点、共通項の抽出）

関係者それぞれの見かたを抽出した。家族（長女）に対しては訪宅時や診察前後に相談員が話を聞く機会を設けた。医師に対しては見解の聞き取りを行なった。介護関係者に対しては、ケアマネージャーからは情報提供のFAXや相談員との関わりのなかで見解を収集した。

B. 仮説②および③（シートの作成と使用）

ENC生活記録共有シートを作成、使用した。

《4. 取り組みの結果》

A. 仮説①

a 家族は介護によるストレス、b 医師は疾病としての症状理解、c 介護関係者は本人の時間ごとの様子変化・長女の心的負荷が心配なこと、以上3つがそれぞれに重要視する項目であった。また、共通に必要なと思われる項目は、時系列による情報収集であった。

B. 仮説②（シートの作成）

本人の行動を重要視し、抽出された相違点、共通項を考慮した、時系列的なシートを作成した。

C. 仮説③（シートの使用）

a 家族は、症状を客観的に捉えることができるようになり、また他の関係者皆の協力を体感することが出来た。b 医師は、幻視や意識障害の変動、服薬可能時期を把握でき、より綿密な薬物療法が可能になった。c 介護関係者は、各デバイス間での様子を知ることで、他施設との情報共有が出来た。また、家族の思いを窺い知ることができ、フォローするうえでも役立ったと感じている。

《5. 考察、まとめ》

在宅における高齢者介護、医療の支援において、情報を一元化することは大きな意義がある。異なる立場、タイミングで関与している関係者の情報や見解を、連続性を持ったひとつのまとまりにすることで、本人の今の状態を皆が認識し、各々の考えを持ったうえで共通の方向性も見出すことが出来た。また、家族支援の重要な手段のひとつになると考えられた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本事例の対象者本人、家族に対し、本事例は本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、文書により同意を得た。

《7. 参考文献》

- ・ドーン・ブルッカー著（2010年出版）「パーソン・センタード・ケア」
- ・加藤伸司著（2014年出版）「認知症の人を知る」
- ・池田学著（2010年出版）「認知症 専門医が語る診断・治療・ケア」
- ・日本神経学会監修（2012年発行）「認知症疾患治療ガイドライン2010 コンパクト版2012」

《8. 提案と発信》

本事例で用いたシートは、あくまでもツールの一例であり、情報共有の方法のひとつの提案にすぎない。各ケースごとに、本人の状態や環境に応じて、負担が少なく且つ適切な手段があると思う。

私たちが強調したい点は、ツール（シート）そのものではなく、職種間を超えて共通のテーブルにつこうという意識の重要性である。